

## 講演「新しい教育課程と、動物飼育、いのちの教育」

永田繁雄



みなさんこんにちは。ただいまご紹介いただきました永田と申します。

■飼育動物の研究大会は心が温かく話し合いは熱い

第8回全国学校飼育動物研究大会がこのような活気のある中で行われていますことに、私も丸一日拝見させていただいて感動しております。大変ホットな大会だと言えます。それは、動物飼育に関心をもつこと自体が、まさにコミュニケーションそのものですので、動物とのコミュニケーションのみならず、お互いのコミュニケーションがこんなに豊かにできるのだらうと感じました。このように、幼児期の教育から大学教育の先生、教育委員会、そして何よりも、動物の医療等に関係されている方々が一堂に会されて、同じテーマで議論し合うことは、そうめったにないことだと思います。

しかも、その熱さにも驚きます。立ち上がって4年間なのにすでに第8回。年に夏冬2回ずつ開催しているからですが、この会をリードしておられる何人もの方々のお力で、このように開催できるわけですが、その熱意をしっかりと感じるすることができます。

私は学校教育、道徳教育を担当していますが、動物飼育に関してはお話できることが必ずしも十分ではありませんので、お断りをしようとも思ったのですが、今日ご提案なされた先生方だけでなく、私の勤務したところのある文京区が会場だということもあり、見渡しますと、何人も存じ上げることがいらっしやいます。そのような皆さんの思いとともに、今、ここでお話すること

になりました。

皆さんが、目線を下ろしていただけるように、資料を細かいものとししました。要項では、7ページぐらいにわたるレジュメとなっています。そしてまた別添の資料もあります。40分弱のお話の時間には触れることは難しいのは分かっているのですが、資料を研ぎすまされた形で「メタリック」しようとしていたものの、「ポー」として作っておりましたら、「メタボリック」になってしまいました。どうぞ参考とされてください。

■授業は「なまもの」だからこそ

ところで、生活科の中で動物を継続飼育する形がいちばん多いのですが、生活科が立ち上がる昭和から平成にかけての頃に、私は1、2年を担任しておりました。その時、子どもたちが「絶対に飼いたい」と言っていた2羽のアヒルを飼いました。しかしこれは、本当にたいへんでした。池がなかったの池をつくったのですが、つくったはいいものの排水ができない。だから、毎日水替えをしなければいけませんでした。

そしてこんなことがありました。半年くらい経ったときのことで。二羽には、タロウとピーコと名前が付けられていたのですが、こう私は宣言したのです。

「今日から、タロウとピーコの名前が入れ替わります。」

いろいろ調べてみて、どうもしっぽが跳ね上がっている方が雄ではないかと思ったのです。子どもに対して本当に申し訳なく、悲しい思いがしました。そのときの子どもたちはもう27歳くらいになっています。年末に十数人が集まって「先生来てください。」と言われて、表参道に集まったのですが、盛り上がり出てくる話の半分以上が、その時のアヒルの話でした。問題の多い飼育体験だったのですが、子どもたちにとって、いつまでも心に残る、原体験のような非常に重要な心の基盤になるのだらうと感じました。

私のような失敗はなさないでいただきたいのですが、皆様も、飼育活動のもつよ



さについて今日の話の中で様々に感じられたのではないかと思います。例えば、「生きもの」を「なまもの」とも読めそうですが、授業は「なまもの」だから生きていられると言われます。動物飼育活動は、予測がつかないことが多いのです。予測がつかない学習がいちばんできるのがこれですね。教科等の学習のほとんどは予定調和ですね。これができなければいけない、こうならなくてはならないと…。基本的には思い通りにいくことが多いわけですが、しかし、動物飼育は違う。指導案通りにいかないことが十分にあって、その方が子どもたちにとってむしろ心に残る。そのような貴重な題材だと言えます。

#### ■教育改革の動きと子どもに見られる問題

ところで、今は教育改革の大きな節目に立っています。レジュメにありますように、今は、「子どもに見られる問題」と「教育に関する大きな動き」が同時並行的に起こっているのです。教育改革の動きは教育基本法改正が大きな動きの基盤になっています。子どもの心の面でも、自尊感情の不安定さ、学ぶ意欲の低下など、なぜこれほどの心の問題が重なって現れているのだろうと感じさせるほどです。これらは、率直に申し上げると子どもの責任ではありません。大人がつくった環境の中のできごとです。しかし、子どもたちの状態を何とかしなくてはなりません。そのための1つとして教育課程改訂の動きがありますが、実はこれが今、大きく動いています。本会の顧問をされている無藤先生は、中央教育審議会の要としてご審議くださっています。間もなく、1月17日に答申が出される予定です。このようなときに、たとえば、動物飼育を生かした教育の押さえについて、学校の教育課程にどのような形で入っていくのかということについても含め、今が最大のターニングポイントになっているのではないかと思います。

では、この後、大きく分けて4つぐらいの話題を差し上げたいと思います。

一つめは、動物飼育や命の教育が求められる背景。二つめは、その心の具体的な問題。三つ目は教育課程改訂の方向。そして四つ目は、今求められる具体的な指導の在り方です。これらについて、一緒に考えてみたいと思います。

#### 1 子どもの学力や体力はどんな傾向を見せているのか…

まず、子どもの学力と体力の問題です。ご存知のように、OECDのPIISA調査が3年おきに実施されています。この結果を新聞はピンポイントで取り上げます。たとえば次のような見出しが踊っています。

「日本、理数離れ深刻」。「日本の高1目立つ無回答」。そして、「15歳意欲も減退」などです。気になるのは、日本の子どもの最後の砦であった「科学的能力」まで落ちてきていることです。順位だけでなく、実際の点数でも落ちています。中でも、科学が「好きじゃない」ことです。例えば、科学関係の職に就くことを期待する生徒が8%しかいません。国際平均は25%ですから、1/3以下になっています。理科的なものに興味をもって仕事を求める子どもが、ぐんと減ってしまっているのです。

なぜでしょうか。正解を求める教育が強すぎるといふ反省も言われます。先ほどの発表にあった北海道大学のカエルの調査のように、動物飼育で自発的な行動が増えていくのは心強いことで、生活科では、自発的な活動や行動を促すことが重要であるわけですが、そのような学習が全体として十分に機能していたかどうか問われます。今の高校1年生は現行の学習指導要領で、この自ら学ぶ学習を様々にやってきているはずなのに、このような傾向が見られることが大きな課題です。

そして、読解力についても3年前よりさらに低下傾向を見せています。その要因の1つは、世界一答えを書かない子どもたちの状況です。何らかの科学的な実験があつて、「このことについてあなたはどう思うか、中身に触れて自分の言葉で書きなさい」というような設問が書けないのです。受信だけではなく、発信も含めた読解力、相互作用的なかわりの豊かさが急に落ちてきてしまっているからでしょうか。

ご存じのように高校生、特に女子高校生が携帯電話に頼っている時間は世界でも飛び抜けて高くなっています。1999年頃にやっとメールの送受信ができるようになりました。まだ10年も経っていないのに、今では、携帯電話で親指運動するから、例えば家庭でも我が子が何を友人と話しているかわからなくなっています。いじめの半分以上はネットにかかわっていると言う人もい



ます。そのようなコミュニケーションの崩壊の時期に、先手を打って働きかけるには、動物飼育の活動は重要な方法であると思います。

また、「全国学力学習状況調査」の結果からも教えられます。小学校6年生と中学校3年生に共通して実施したのですが、集計結果の中で着目したいこととして、正答率が高い子どもは、学校のきまり、規則を守っている子ども、人の気持ちがわかるようになりたいと思う子ども、そして、家の人とさまざまな出来事について話をする、つまりコミュニケーションをとる子どもと、正の相関関係が強く見られることです。

ところで、「魚や貝、昆虫をつかまえたことがありますか」「生きものを飼育したことがありますか」という質問に対し、小学校6年生では66%、中学校3年生では55%の子どもが「ある」と答えています。小学校では「何度もある」と回答する子どもが多い傾向があります。その逆に中学校では「全くない」が増えています。このように、子どもの世界から動物がだんだん遠のいてしまっているということは、発達段階上仕方のないことかもしれません。なお、この調査と学力の高さとのクロス集計は、有意な相関まで見られなかったのでしょうか。今回の公表の内容には入っていませんが、このようなところに私たちはもっと関心をもつ必要があると思います。

もう一つの問題は、子どもたちの体力も急激に落ちていることです。新聞でも「子どもの体力下げ止まり」と報道しています。グラフを見ますと、昭和62年から平成9年頃までずっと落ちてきて、平成9年から19年まではほぼ横ばいとなっています。やっと下げ止まったということは良い言い方ですが、逆に言えば、体力は今、どん底だということです。体力が落ち始めたのは昭和60年頃です。それまでは横ばいで、さらにその前は上がっていました。この体力の曲線と、経済や景気の曲線がなんとなく似ています。大人の活力と子どもの体力は連動しているのでしょうか。

その中で、平成に入った頃からバブルの崩壊の中で、体力が急激に落ち始めてきたのはなぜなのか。急激に増えたテレビゲームやヘッドホンステレオなど、自分自身に入り込むものが急激に増えたからです。こ

れらのことを私は「自己中心グッズ」と呼んでいます。敢えて他人とのかかわりを避けるための道具です。本来ならば、携帯電話などは、コミュニケーションを豊かにするためのものなのに、コミュニケーションを遮断する方向で使われてしまっています。その結果、コミュニティをつくらなくなってしまった。しかも、このようなものを使う割合が世界でトップクラスになっています。遊びが「動」から「静」に変わります。そして、世界でいちばん家の手伝いをしなくなりつつあります。そのような子どもたちだということを押さえておきたい。

どうすればよいのか。その下降曲線をもう一度跳ね返すためには、実体験の中で子どもに良いストレスを与えていかなければならないのです。子どもたちはキレやすくなったというけれども、それは、ストレスが増えたのではなくて、コップが小さくなったのです。負荷を与えて、このコップを大きくすれば、ストレスはこのコップの中にたまりません。ストレスが揺らげば、胸のあたりでむかつく。ストレスが頭に上ってあふれるのがキレる状態です。それを逆に、頭から胸、胸から腹、そして腰に下ろす。腹を据える、腰を入れる、そのような体を使う体験教育が必要です。その最大のものが、この動物飼育を通じた教育であると私は思います。

私たちは、どうしても、見える学力、つまり花や実の数や大きさに目が行きがちです。しかし、その下で支えている枝や幹の力、つまり体力がなくなっているのです。枝や幹が弱いのと、心である根っこの部分が深く育たないのとは、つながっています。そんな状況で実が大きく育つわけがありません。この「知・体・心」の中で、特に体験を通して心の深さを育てることに、私たちは目を付ける必要があります。

## 2 子どもの心の成長と生命尊重の心の希薄化の問題

子どもの心の豊かさ、生命に関する感じ方について考えてみたいと思います。

今回の学習指導要領改訂の中で、心の問題に関するキーワードとなっているものに「規範意識」と「自尊感情」があります。これらの心を育成するために、動物飼育は大きな力があると私も感じます。

例えば、一つめのところに、「ルールを



守る」「マナーを大切にする」「モラルを確立する」という三重の図がありますが、これらを生命にかかわることで考えるならば、最初から「他者を傷つけない」「自他ともに気持ちよく」「自律の心で豊かに生きる」という感覚になります。先ほどの発表にもありましたように、電車で席を譲る子どもと動物を飼育している子どもには相関があります。このような傾向は他の調査でも同じように見られます。規範意識は英語で「norm」と言います。規範を自然に表している状態が「normal」です。つまり、当たり前前を当たり前前のようにする。これがマナーです。

私が担任していたときにこんな子どもがいました。小学校3年生の子どもです。土曜日、保谷の駅から池袋行きに乗ると、しばらく経っておばあちゃんが乗ってきました。おばあちゃんに席を何とか譲ってあげられたその次の週の土曜日、またおばあちゃんが乗ってきました。同じ時間にお稽古に行くのだと気づきました。今度はすんなり譲ることができて、その次の週からはおばあちゃんの指定席になりました。しかし、おばあちゃんが乗る前に、足に怪我をした男の人が横に立っていたというのです。その話をしてきた子どもが、「先生、こんなときどうする？」と聞いてきました。その子は本当に悩んだそうです。この、悩むことが、おばあちゃんと男の人の気持ちに一生懸命に入り込もうとしていることです。想像し、共感しているのです。結局、この子どもは立ち上がってしまったそうです。ところが、おばあちゃんが来るまで席が空かなかった。そして、おばあちゃんを見たときに涙があふれてきたそうです。このように迷い、葛藤することが、どのように生きるかというモラルそのものです。ここまで想像力や共感力がはぐくまれていくのです。動物飼育は、この規範意識の高さをつくる大きな力となる教育です。

もう一つは「自尊感情」についてです。私たちは、自尊感情が十分にもてない子どもたちのために、動物を介してセラピー的なことを行うこともあります。一方で、過度な自尊感情をもつ子どもがいます。例えば、こんな本が出版されました。「他人を見下す若者たち」。同じ時期に出た本で、「オレ様化する子どもたち」というものもあります。このように、過度な自尊感情は世

代を超えてつながっているのです。この、過度の自尊感情はなぜ起こるのか。そのことを「誇大自己症候群」と名付けた岡田尊司先生は、それは大人がつくった「ハイテク空間」が引き起こすのだと言われます。これは思い通りになる空間のことです。三浦展先生は、「ファースト風土」が過度な自尊感情を生み出していると話されます。じっくり取り組まなければ育たないものがある。しかし、現在は「ハイテク空間」と「ファースト風土」の中で、子どもが思い通りにアクセルを踏もうとしがちになる。そうするとブレーキをかけている子どもにぶつかっても平気なわけです。だからこそ、右側のアクセルと、左側のブレーキの間に、子どもが自ら運転するハンドルを使う力を育てるのです。そうすることで、適度にブレーキを効かせながら自分の生き方をコントロールする。本当の自律というのは、自分で運転してゆくこと、つまり、セルフコントロールのためのハンドルをもつことです。健全な自尊感情とは、そのようにイメージすることができます。ところが、今はこの自尊感情さえも二分極化してしまっている。そんなところに私たちは目を向けなくてはなりません。

この高い「規範意識」と健全な「自尊感情」をもたせることができれば、それが心の活力になって子どもたちの生命観が育つ二つの方向性が生み出されます。これはイメージ図ですが、その両方が合わさった斜めの方向に「ボランティア的」な方向が生み出されます。これはいわば、「おたがいさま」の世界です。例えば、阪神淡路大震災でたくさんの方が被災し、ボランティアを受けました。中越地震の時には、兵庫県などの被災した人たちが新潟県にボランティアに行きました。元は関係のない人どうしなのに、その人たちの気持ちを想像し、共感を深め、そして動き出す。これが、「生きる力」のベクトル、すなわち「心の力」なのです。動物飼育活動は、広くこのような力を育てていく原点になっていると私たちは考えます。

そして、私たちが特に大切にしたいこと、それは、生命を尊重することについて、私たち大人が多様な見方をすることです。レジュメにイメージ図がありますが、そこでは真ん中に「いのち」と置かれ、それについての多面的な見方を周囲に配置し



ています。この中で、例えば、下に偶然性、有限性が位置付いています。それは、誕生、病気、怪我、老衰、死、などでイメージされるものです。他にも、生存競争の側面と、共生や共存の側面、生命が祖先から子孫へと連続しているという側面など、実に多様です。さらに、生命を輝かせる「生きがい」の側面もあります。このように、一つの生命に関する体験活動でも、子どもたちは多面的な見方や感じ方を育てていきます。この多様さを意識して、私たち大人が子どもにはぐくんでいくことが重要です。

明日は成人の日です。それに合わせて今、献血運動のキャンペーンが行われています。それは、高齢化社会なのに特に若い世代の献血率が急激に落ちていることが大きな理由です。ある新聞では、このように出ています。「献血ルーム、出血大サービス」。

「ハンバーガー、ドーナツ、アイスクリーム、何でも食べ放題」と書かれています。私も気になって行って見ました。そうしたら驚いたことに、2人ぐらいしか献血しないのに、5人も来てハンバーガーを食べている。その光景を見て、つらい思いをしました。その次に行ったとき、張り紙がありました。「一人2つまで」。そのような褒美で釣るのはよくないとも言えるけれど、命には代えられないわけです。お年寄りが子どもの数よりも多い時代です。そのような見えない相手の生命への想像力、つまりボランティア精神のようなものをどこで鍛えるのか。それは、生命に関する体験を充実させるのが最も力になるのです。

ところで、参考資料として、生命に対する多様な見方、感じ方、考え方を整理しましたので、何らかの参考にしていただければと思います。

生命に対する見方は、いろいろな角度から整理することができます。カリキュラムをつくるときに、どのような見方をすることが大切なことか、私たちはまず、手がかりをもたなくてははいけません。たとえば、生命について「知・情・意・体」のそれぞれの側面から捉えることができます。先ほどの提案の中にも、「観察飼育」と「愛情飼育」の話題がありました。これはいわば、「知」と「情」でしょうか。それだけではなく、たとえば生きる意欲や居場所づくりの「意」の教育もあります。そして、身体的な「体」の面からとらえることもできま

す。

また、生命については、道德性の成長の面から整理することもできます。これは、学習指導要領の道德の内容とその解説を並べていますが、これは、一つの目安となります。もちろん、子どもの実態に応じて柔軟に理解する必要もあります。先ほどご紹介された調査の中で、「一度死んだものが生き返る」と考えるかどうかという内容がありましたが、その際、例えば「なぜ生き返ると思うのか」などと、その先まで聞いてみると、様々な興味深い見方が出されます。「生き返る」と感じる割合は、おおよそ小学校低学年は高く、高学年になると下がってきます。しかし、高学年から中学生になると「よみがえり」などに興味をもつようになり、大学生になると、ある女子大では、半数以上が「生き返る」と答えるように、また増えていくのです。いわゆる「エハラー現象」でしょうか。しかし、はっきり言えることは、生命尊重の教育を体験に基づいてしっかりと行えば、「生き返る」と回答する割合は、明確に下がります。このように、生命については、発達段階の面からも多面的に見ていく必要があると思います。

命の見方を私たち大人が多様にもつことが大切です。

### 3 学校教育改革と、生命尊重の教育の一層の重視

さて、生命尊重の教育については、最近も様々な強調されています。例えば、改正教育基本法です。その第2条の4に、「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と、明確に書かれました。

それを受けた学校教育法は、半年前の昨年6月に出されましたが、義務教育の目標が7から10に増えましたが、その最初の3までが今までにない新しいものです。その最初の3のうちの二つめの目標が、「学校内外における自然体験活動を促進し、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと」となっています。このように、学校教育法でも自然体験活動を通した生命尊重の教育がうたわれています。

そして、この17日に出されることになる中央教育審議会答申について、12月25日に



出された答申案で見ると、今回の学習指導要領改訂で、様々な強調点を見つけることができます。

まず、「開かれた個」の重視です。これは、象徴的な言葉だと思います。「開かれた個」とは、自分をコントロールして人や自然やなど、いわば生命あるものとかかわる力です。「自制」と書いてありますが、セルフコントロールですね。この力を養っていく。

各教科等の指導の改善では、一つめに、理科の中で、「生活科の学習を踏まえ、身近な自然について児童が自ら問題を見だし、見通しをもった観察・実験などを通して問題解決の能力を育てる」と書いてあります。実際には、「表現する力」の育成まで、かなり強調されています。時間とスペースの都合で小学校だけ書いてありますが、中学校でもほぼ似たような内容が入ってきています。

二つめとして、生活科では、先ほど無藤先生がお話になったそのままのおりです。「動物と植物の双方を自分たちで継続的に育てることを重視するなど、自然の素晴らしさや生命の尊さを実感する指導の充実に配慮」することとあります。この中に「双方」と書いてあります。これは「and」なのか「or」なのかと言えば、どう見ても「and」なのです。このように明確に書き込まれた背景には、この研究会の力も有形無形に働いたのではと感じられます。生活科を一つのキーステーションとして、幼児期から中・高学年段階へ動物飼育の在り方を広げていっていただけたらと思います。

そして、三つめの道徳の内容では、すべての段階で「生命を尊重する心」を重点とすることという趣旨が入りました。

四つめとして、総合的な学習の時間については、内容は例示の形で示されることになっていますが、その中に、「効果的な事例の情報提供やコーディネートの役割を果たす人材の育成、地域の教育力の活用などの支援策の充実に図り、十分な条件整備を行う必要」があると書き込まれています。つまり、総合的な学習の時間では、年間プランを明確にして進めるために、地域社会の実際のプロの力を大いに生かしたいということなのです。

参考までに、この後、中教審答申は1月17日に出されます。そして、新学習指導要

領の告示は、平成20年3月の予定です。ということは、2月には大方の様子が見えてくるのではないかと思います。そして、「解説書」は20年の夏前頃になるでしょうか。移行措置は平成21年度から行われ、全面実施は、小学校が23年度、中学校が24年度と予想されています。

#### 4 学校における動物飼育活動を一層充実させるために

しばらく前に聞いた話ですが、ある保護者が図書室に司書として勤務していて、職員室に立ち寄ったときのこと。「アカミミガメの甲羅でつくった夏休みの宿題はすごいね」と先生方が話していたそうです。カメの甲羅が粘土細工でペタペタと貼ってあるんです。「このカメの甲羅どうしたんだろう?」「きっとあの子がカメから剥がしたんじゃないの?」「あの子だったらやりかねない…」というような話が出ていて、悲しくなったそうです。カメの甲羅はちょうど鱗と同じように脱皮し剥がれるのです。それをそのまま使ったというのに、私たち教師には知らないことによる落とし穴がいくらでもあります。

だから、飼育への熱意があっても知識がないことの問題が生じます。中には、熱意さえもない場合があって、飼育担当者だけの問題として閉じられがちなることもあります。問題点やトラブルを子どもだけのせいにする教師もいます。私自身も危なかったんです。アヒルの飼育がたいへんだったものですから、子どもたちに「もっと頑張りなさい。できないことはない」などと、力づくで飼育させ、子どものせいにしそうになってしまいました。

そうではないですね。やはり、命は、大人も子どもも協力して責任をもつことが大切です。参考として、「道徳の時間を生かした指導の充実のためのポイント」を挙げています。皆さんご自身がふだんから実践していることだと思いますので、今は詳しくは申し上げませんが、次の11のポイントです。

まず一つめは、共通理解を得ること、二つめは飼育の継続性を重視することです。三つ目は、休日や長期休暇も含めた責任のある体制をつくること、四つめは、意外にこれがうまくいっていないことなのですが、飼育舎は裏庭にあることが多く、これ



を表の庭に置いてみんなの目の届きやすい場所に設置することが必要です。そして五つめは、飼育にかかる相談窓口をもつことです。先ほどの品川区のようなご提案が役に立ちます。六つめには、地域住民や保護者に広報して、理解を広げることです。町田市からのご提案などは、理解を広げることを超えて、地域や保護者の人々がパートナーになっていますね。パートナーというのは、まさに協力し合う姿です。パートナーになれば、クレマーにはなりません。今、都市部では、保護者が消費者になりがちです。消費者というのはクレマーです。アメリカではこのことをヘリコプターペアレンツと言うそうです。なるほどなと思います。大騒ぎして、いつまでも追いかけていくということでしょう。保護者にも飼育などの体験と一緒に参加していただき、巻き込めばよいのです。そして七つめとして、手間ひまをかけられる体験にすることです。ちょっとやれば終わるようなことではなく、一定の時間が必要です。子どもたちに、「時間」「空間」「仲間」だけでなく、もう一つの「手間」を与えること、スローフードな体験を与えることが必要です。そして、八つめは、衛生上の問題です。九番目には、すべての子どもがふれあう体験となるようにすることです。飼育委員会は学校の一つの組織なので、どうしても一部の子どもたちしかかかわらなくなりがちです。委員会や係活動を当番活動に変えるなど、全部の子どもたちが参画できるような工夫をされている学校は多いと思います。そして、十番目として、子どもに元からムリな世話などを求める活動にはしないことです。最後に、学校または学級なりの飼育マニュアルをつくって、柔軟に変えていくことです。

このように、心得るべきことはいくつか整理していくことができそうです。それぞれの学校などで、まず考えを進めてみたいものです。

## ■おわりに

なお、道徳の時間について触れる時間はありませんが、参考資料とともに見ていただけたらと思います。このことに関して申し上げたいのは、道徳の時間で子どもが育つ部分と、飼育という直接体験で子どもが育つ部分とは違う面もあるということです。道徳の時間では、例えば、「心の体験」として星野富弘さんなど生き方を題材にして生命を考えることも多いのです。したがって、心の体験と、実際的な体験というように、アプローチの仕方が違ってきます。是非、これらの両面を生かしてこそ効果が一層高まると考えていただけたらと思います。

最後に、今、様々な「〇〇教育」といわれる教育課題があります。レジュメの最後にあるとおりです。それらの教育課題と動物飼育とのつながりをイメージして、学校の教育活動全体に働きかける飼育体験になっているかについて考えていただけたらと思います。例えば、動物飼育は「環境教育」につながっています。今年は「国際カエル年」だそうで、カエルの生息地を守ることは、まさに環境を守るということに通じています。東京の大きな4動物園でも様々な取組が行われていると聞きます。また、動物飼育は、「食育」にもつながっています。「命をいただく」ということと、飼育体験とのつながりは必ず出てくるからです。

このように、動物飼育活動が様々な教育課題を進めるのにも大きな力となっていることを、私たちは感じ取っていききたいと思います。

動物飼育体験は、子どもたちの生きる楽しさだけでなく、生き方そのものを育てていく教育活動として、学校教育の重要な要となると私も感じています。これからも、皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

本日は貴重な時間をいただきました。本当にありがとうございます。

(文部科学省初等中等教育局教科調査官)